

山



1 3 6

日本山岳會

山を護らう

國を焦土と化しても、根こそぎ動員してもといふやうな、向ふ見すななくさに、國土國力の荒廢疲弊その極に達した中で、われ／＼の山は、むしろその本來の姿を取戻したかに思はれる。

べき規準を一步も出ないものであるが、――も辨へない人々が、季節ともなれば山に殺到するの盛況を呈した。

山の開發なる文字を輕々しく取上げ、これを曲解した人々の手によつて、度を過ぎた登山路の開き、粗雑な山小屋の濫設が、沙塵會葬もなくといふより、ある場合には誇り顔にさへ行はれてきたのである。そしてこれらの事は、日本での高山大岳が集り連る信飛越甲駿の山岳地帯に最も甚しかつた。その結果は言はずとも明かである。

しかし、一冬越すと山崩れや落石で通れなくなるやうな道を氣息エン／＼たる車に運ばれ、地圖も見ずに、ペンキ塗の指導標に導かれ、すしづめの山小屋に一夜を明かし、苦勞も苦心も契らぬやうに鎖や針金の手摺さへ設けられた徑を辿つて、登りついた山頂は空鐘の捨場所に異らぬといふのは自然の神祕、山の靜寂はおろか、登山の快味もなにもあつたものではない。

たゞさへ高きからいつても、大きな山々について、一般大衆に山登りは安易なものといふ誤つた考へを抱かしめるに至つた。登山の経験も淺い、登山道徳、――といつても日常の社會生活に於て守る

山は神聖だの、靈峰聖峰だのと何かにつかれたやうな物の言ひ方をしないでもいゝ、登山の意義だ登山の倫理だと鹿爪らしく、ひらき直はるにも及ばない。文字通り山が傷けられるのを防いで、山を本來の姿に護ることは、われ／＼

登山者の大きなつとめであり、またどうしても譲り通すだけの決心をもたねばならないのである。

大袈裟につきこむならば、近郊の丘陵小川にちかひものとなる惧れは、充分にある。例へば、松本から島々谷、上高地に至り、槍ノ肩にのし上つて、尾根傳ひにザラ峠まで飛ばし、立山温泉に下つて宮山へ出る自動車道路なども考へ得られるのだ。そんな道が貫通したら、たとへ山頂の三角點は避けたとしても、山も山登りもなくなつて了ふ。槍と穂高の峰傳ひに坦々たる縦走路なるものを開きくすることゝ可能であるが、それが果して山に登る者にとつて、幸ひであり、たのしみであらうか？恐らく山に心を惹かれ山を愛する者ならば何人も、度を過ぎた手の入ることを好まないであらう。

山は登山者の手で護りたい。然し個人では中々むづかしい場合もある。日本山岳會もその他の登山團體も、過去に於て山の護り方に就て、もつと積極的であるべきであつた。その點では遺憾に思ふことが少なくないけれども、過去のことは暫くおいて、自然の力で本來の姿を山が取戻したのをいゝ機會に、どうかしてこれを餘り傷つけずに置きたい。

このためには今後日本山岳會も力をかす積りであるが、他の登山團體はもとより、營林當局、觀光團體、地元の人達の山に對するよ

き理解と協力とを切望して已まないものである。(ふじしま)

目次

- 山を護らう……巻頭言……二
- 高田富士……關根吉郎……三
- 山の畫囊から……中村清太郎……七
- 報告・紀行
- 春の藥師岳單獨行……
- 立山スキー行……松村 浩……五
- 春の鹿島嶺……
- 立教大學山岳部……七
- 晩春の赤津山……佐久間惇一……九
- 清津峽への道……板倉黎子……二
- 歪められた登山思想……
- 浦松佐美太郎……三
- 愛蔵書から……藤島敏男……二
- 圖書批評について……
- 圖書批評……
- 山上の嘆。山岳信仰……二五
- 會員通信……
- 穗高通信……伊藤洋平……二六
- 東駒の春……小倉志郎……
- 法華院にて……松岡 實……
- 會務報告……柴山登茂次……
- 表紙繪……中村清太郎……一八



高田富士

(第一回)

開根 吉郎

高田富士を語るに就いては、燈臺下暗しといふ云ひ古された言葉をもう一度言はないわけにはいかない。私は長らく早稲田大學に通ひ、その間山岳部の部員として山に關してはいくらかの知識を蓄へ得たものと考へてゐた。山岳部の部室では我が國の山の計畫ばかりでなく、遠くヒマラヤの山々を論じ合つたりした。ところがその部室からは、距離にすればほんの五〇米位のところにある高田富士に就いては卒業する迄その存在をすら知らずに過したのである。

卒業して兵隊になると、大病をした。何ヶ月かの後片輪の身となつて漸く生きながらへることが出来たが、すぐ働くわけにもいかず静養を續けた。『江戸名所圖會』や切繪圖を比べてみては、暇にまかせ、富士を採しに出掛けたり六地藏を廻つたりした。

勸請してあり

江戸の切繪圖といつても、いろいろあるが、その中に大久保戸山高田邊之圖と云ふのがある。それに依ると、今の早稲田大學は井伊掃部頭の下屋敷に相當し、隣には現在も姿をとめてゐる水稲荷社があり、その間に別當寶泉寺といふ寺が見られる。高田富士は、その寶泉寺に富士の模様と共に記されてゐる。名所圖會の方には、説明があり、更に富士の繪まで出てゐる。始めてそれを見た時は、自分の迂闊を恥じないではゐられなかつた。説明は次の通りである。

高田富士山

稲荷宮の後にはあり 巖石を疊むで其形を模擬す 安永九年庚子に至り成就せしとなり此地に住める富士山の先達藤四郎といへるもの之を企てたりといふ 毎歲六月十五日より同十八日まで山を開きて參詣をゆるす 山下に淺間宮を

説明によれば、富士の形を眞似て山を築いたこと。安永九年に出來上つたこと。大先達藤四郎が企てたこと。富士山らしくお山開きをやること等がわかる。丁度その時分私は登山と宗教の問題を考へてみようとしてゐた時であつたので、幾らかの手がかりを與へられるかも知れないと思つて、早速この富士山を採しに出かけた。文學部の建物と水稲荷の丁度眞中になるので表の道路からは一寸わかり難い位置ではあるが、人手が築いたと一見でわかる富士山はあつた。山は豫想してゐたよりは大きかつた。鳥居や石碑が、學生の街には似つかはしくない嚴めしい姿に見えた。碑には、『青山日行翁』の五字を連ねた小さなもの、講祖日行藤四郎翁開鑿靈蹟といふ大きなもの、共に名所圖會の如く、藤四郎が此の富士の講祖であることを示してゐる。大きな碑には左下に、大正二年七月建高田十三夜元講としてあるところをみると、これが講社の名であらう。

その中央には一番上に富士山の紋様があり、その下に藤といふ字がわかり難い字態をしてこれも一つの紋様となつてゐる。さうしてこの二つが、此處の講社のしるしに違ひない。その下は富士山北口胎内模造修築記念碑とある。その碑の左手には、一つの穴があいてゐるから、その穴が北口胎内の模造であらう。富士山を模造し、續いて宗教的靈驗を加へる意味で胎内なるものを併せて造つたものであらうか。

石段を登ると、社がある。名所圖會にある、そのまゝの淺間神社である。右手には番人の家に間違ひないが、社務所らしくもない小さな家が一軒、日向で年寄が洗濯してゐた。

まだ景氣はよかつたけれども、大きな戦争の眞唯中に高田の富士などを問題にする様な人は、東京市民何百萬人もようと餘程珍らしかつたとみえて、話しかけると年寄は先づ腰を延し、嬉しさうな顔をして私を見上げた。名所圖會の説明だけしか知らぬ時であつたので、藤四郎が開祖であることは、下の碑で確かめ得ると、話題としては何時出来たか、お山開きはやつてゐるか、今でも參詣者があるかと云ふ様に限られたものしかなかつた。

何時の頃出来たものかは、年寄ははつきりは知らなかつた。百五十年祭といふのを確かもう十年も経ちますかな、その時分にやりましたと云ふから大體安永九年に相當するかも知れないと思つた。お祭りであるお山開きは、『お山開きは昔から七月二十三日です。私共の子供の頃からさうです』と六月十五日から三日間の説を否定した。子供の頃からと云ふから明治の中頃は既に六月ではなくて七月になつてゐたと思はれる。お山開きに關しては『東都歳事記』にも六月十五日の條に次のやうにある。

高田寶泉寺水稲荷内富士參十八日迄諸人群衆す。駒込に同じく麥麩の蛇を商ふ。庭中水茶屋諸商人多く出る。

お山開きは、夏の行事であらうから、舊暦の間は六月であつたらう。曆が改められた時分に、七月に變更されたものであらう。

『昔は大勢おいででしたが、この頃の御時勢ではたんとはお見えになりませんな』

いくらかでもお山開きに来る人があるといふことは、寧ろ私には驚異であつた。近代科學を學んだ者の常として、江戸からの民間信仰の根強きにはまつたく疎かつたのである。年寄の洗濯の済む迄、私はお山を登り早稲田の界隈を眺めてゐた。東側はすぐ文學部の建物に接し、北側は新しい商學部の建物である。頂に立つと、丁度その四階の高さに相當する。今でこそ、これらのコンクリートの建物

に遮られ、眺めの大半は削滅されて了つたけれども、早稲田田圃の一角に突き上げられた當時のお山は、北から西にかけては目白臺から關口に續く高臺を江戸川を隔てて目近に望み、西から南にかけては、近くの穴八幡から赤城に続く丘陵を右手に控へ、遠く東京灣の海を眺め得たのかも知れない。

年寄の洗濯の済むのを待つて、

けはしくつけた途を下りた。神社の前に手洗ひに使つた石があるがその真中に十六葉の菊の御紋が付いてゐる。菊の兩側に奉納の二字があり、石の兩面には右に、身縁講中、左に安永八巳亥五月吉日と記されてゐる。私は菊の御紋の理由を質ねた。どうしてだかわかりませんと云ふ答であつた。『菊の御紋がありますので、仲々面倒で使はずにかうしてあるのです』有難いものを、もてあましてゐる様が伺はれた。安永年間といへば、後桃園天皇、將軍は十代家治の御代である。江戸は將軍の都であつたとはいへ、菊の御紋が漫りに使用されたといふことはあるまいと思ふ。それかといつて、身縁講といふのが、直接朝廷と關係があつたわけはない様であるから、私にもどう云ふわけかわからないのだが、何時かは何かの手がかりを見出すことも出来るかと、今も

心には留めてゐる。

どうもはつきりした答が得られないので、藤四郎のことを話座にあげた。藤四郎と聞くと年寄は急に嬉しさうな顔になつた。

『え、このお山は藤四郎さんがお造りになつたのです』

あまり有名でもないお寺を訪ねると、本尊は聖徳太子のお造りになつたものだとか、弘法様のお手造りだとか聞かされる。私は一寸それを遠想した。然しどこことなく眞實味のある純な感じを受けた。そして寺の坊主よりは、信仰心が板に付いてゐる様にさへ思はれた。『藤四郎さんは、其處の門前に住んでゐられたさうです』と語を續けた。藤四郎に向つては、きまつてさん附けで呼んでゐる。之が親しみももて、又つていける氣持にもならせたものと考へられれた。此處の大先達を如何にも身近かに感じてゐる氣持は嬉しかつた。ところが門前とはいつたところであらう。早稲田の間が、この附近の地名を知らぬとは笑談にも云へたものではない。江戸の地圖を眺めてみると、日和下駄の著者も驚いてゐる様に神社佛閣が大きな土地を占めてゐるのに驚くのだが、その大きな寺の前にはよく、門前とか門センと記された地名が見當る。私も漠然と牛込の總

鎮守であつた穴八幡の門の附近を門前と云つたものと考へ、わかつた様な顔付をしてゐた。これも私の知識の不足であつた。地圖には明瞭に門前なる地名が見えるのである。穴八幡から現在の戸塚グラウンドに通ずる道路に當る地點に放生寺門前と記されてゐるのである。放生寺は穴八幡の別當である現在の淀橋區戸塚一丁目の町内であり、映畫館全線座などは、さしずめ門前の全線座と呼ばれるわけである。名所圖會の『この地に住める』も大體この附近にゐたことを示すもので或はこれが門前であつたとしても別に矛盾はない。後に記すが、この藤四郎を一の崎人として扱つた、『百家琦行傳』には『駒込高田の町に藤四郎と云ひし者ありて』とあるが、駒込と云ふのはどういふことか今もまだわからない。

『富士講唱文獨見之祕書』には日行青山俗名藤四郎には生國但馬國にて寶永三丙戌年出生仕享保元年十一歳にて江戸表に罷出享保六辛巳年十六歳にて初て御富士山に登山仕とあるから、戸塚に生れたものではなく、富士の行者になつてから、此處へ移つて來たものと考へられる。

年寄は、まだ言葉を續けてゐるのである。山の中腹を指さして、『あそこに白い岩が見えますね、あれは烏帽子岩と云ふのですが、あれは藤四郎さんが駿河のお山から擔いで來られたものさうで』私は思はずき出すところであつた。指された名は、きめの細かい、白い膚の、名のとほり烏帽子を思はせる岩ではあるが、表面に出てゐるところだけでも、一噸はあらう。如何に富士山の大先達だからと云つても、持ち上げることにさへ不可能である。宗教の一つの特徴として、開祖を無限に絕對視する傾向を指摘出来るが、此處の藤四郎にも、かゝる絕對者の特性が、附與されてゐるものの如くである。それをそのまゝ信じられるか否かが信仰を大きく左右するものと考へられる。私は續いて、藤四郎の墓を質ねた。獨見祕書に依ると、彼の死は天明二年であり、齡七十七とある。名所圖會の安永九年に富士山を成就したとするとそれから二年後のことである。

『お墓は改代町の二軒寺にあるさうですが、こゝにも碑がありません』との答であつた。二軒寺の方は二軒とも墓を探してみたが、見當らなかつた。淺間神社には××君祈武運長久といふ種類の紙が柱や壁に貼つてある。極く最近でもこの淺間神社を信仰してゐる人は少くなく、信仰の程度も決して低いものでないことを示してゐる。間もなく私は其處を辭したが、別れる時その年寄は、現在この講社の世話人はグラウンド上の××さんがやつてゐるから、××さんを訪ねたら或はいろ／＼とわかるかも知れませんが、親切にも教へて呉れた。不精な私はすぐには訪ねなかつたが、別の機會に講社の世話役連とも會ふには會つたのである。(未完)

(カットは長島重二郎氏筆)

原稿募集

最近原稿の到着が減つて参りました。夏山の收獲のあつた方も多しと存じます。何卒奮つて御寄稿下さい。

一、締切は毎月十五日

一、會員通信の場合もなるべく原稿用紙をお使ひ下さい

一、原稿用紙は十五字詰にして下されば大體都合です

一、掲載の原稿は編輯の都合により訂正、一部削除等をすることもありすが御諒承下さい

『報告・紀行』

春の薬師岳單獨行

名 須 川 浩

四月末から五月にかけて、雪の薬師岳へ、ひとりでスキー登山を試みた。戦時中この方面を訪れる人も少く、大多和の村なども昨年は一人の登山者も姿をみせなかつたといふ。今回も山に在る十日間、薬師と一夜泊り合はせた外は、何人にも會はず。山は昔の静寂をとり戻したやうである。登山の道筋、山小屋の近状なども参考にもなればと、こゝに記す。

四月廿四日 富山より高山線に乗接へ午過ぎに猪谷驛着驛前から船津町の鑛山行軌道に乗乗する事を得て十四時には土に着いたが降雨繁く其の儘街道沿ひの宿屋に泊る。

廿五日曇 ショートスキー兩杖寝袋を含めて八貫目にも達する重荷は汽車の疲勞、營養不足訓練不足四十歳の瘦身には全くこたへ、四五町毎に休み休みにして、五時間

もかゝつて漸く大多和に着いた。人夫の助を借りることにして交渉したが急の間に合はず時間は早い

が村外れの吉田長衛門方に宿泊。

廿六日薄曇 隣家の原田兼太郎老人に日歸りて有峰迄荷物を運んで貰ふことが出来たので今日の一日はのんびりと雪の大多和峠を越えることが出来た。峠の上から遙か彼方の天空に大きく聳える薬師本峰を望んだ時は果して之を登り切ることが出来るだらうかと危ぶむ程だつた。

峠を降る途中食用野草ハナナを澤山採集して夕の食膳を豊かにした。有峰は未だ一面の雪で雪しろで増水した西谷は何處をどう捜しても安全に渡渉する地點が発見出来なかつた。有峰に残つた二軒の小屋の中山本金二郎と櫻札の掛つた方に泊る。阿曾布村の熊追の獵師四人と同居。仔熊肉の味噌煮といふ珍味を馳走になつた。

廿七日快晴 有峰から尾根通し太郎平一率師往復の計畫は、西谷渡渉困難の爲變更の餘儀無きに至つた。同宿の獵師から、折々峠下眞川ベリ的小屋が使用出来るかも

知れぬと云ふ事を聞込んだので、獵師と分れて身輕にして七時頃偵察に出かけたが和田川下流九五三米の地點の橋は健在だつた。橋を渡つて尾根に取付く、急な尾根ではあつたが、ブッシュは雪に完全にかくれてゐた。一しきり登つて一二〇〇米の地點で折立峠へ導くならかな尾根に合する。峠の上からの薬師は一層近く一段と壯大に眺められた。峠下の眞川は幾條にも分流して渡渉し難く出来た小屋は殆ど屋根迄埋れて居り雪も吹込んで居たが、手を入れれば使用出来るさうに見られた。時間も早かつたので小屋内の濡物を乾かす薪を集め、雪を除く等の作業をして小屋を整備した。夕方近く小屋を辭去して往路を引返した。峠からはザラメ雪にスキーは快適に滑走した。

廿八日快晴 荷物を全部背負つて有峰から昨日の行程を繰返した。數日間の山歩きで身體が馴れては來たが峠迄の登りは實に苦しかつたが、此處で取つて置ききの食糧生卵子一ヶと鮭の罐詰を半分食つて元氣をつけ、十四時に峠下の小屋に入る事が出来た。

廿九日曇後晴 午前一時に起床して登頂を志したが霧がたちこめて細雨が顔を打つ。再び巖に就く、再び眼が覺めた時には明るくなつ

て居り、風が出て霧が吹拂はれつゝあり、上天氣の様子になつてゐたので、急いで支度して六時に出發した。直ぐの尾根に取付いた。雪はしまつてアイゼンがよく利いた。一、八七〇米の三角點に八時に着く。此の邊からは樹木も少く眺望は素晴らしい。二、一九三米の三角點に達したのは、十時半だつた。薬師の頂上は大きく迫つて來たが、未だ九〇〇米からの登高差を残してゐる。雪が柔くなつて來た事も考慮に入れると、此の儘登り切るのに尙五時間を要する事を考慮して、萬全を期して殘念乍ら引返すことにした。尾根、谷の状況を視察し乍ら十三時に小屋に歸り十五時には夕食を済ませて十六時まだ日の高い中に寝に就いて明日に備へた。

卅日快晴 午前一時起床二時朝食二時四十分發、ランタンを點じて昨日の尾根と其の北の標高尾根との間の澤を登つた。一八七〇米の三角點に着く頃には夜も明放れ立山連峰彌陀ヶ原が一際美しく眺められた。未だ眞白な雪鳥が歩いてゐるのを何度か見受けた。昨日の引返し地點を七時半に過ぎ、太郎山の三角點迄登らずに其の北側をトラバースした。黒部五郎、雲の平の山なみが印象的だつた。二六五八米の地點をスキーデポと

した。流石に風が強く幾度か風を背にして呼吸を休ませた。東側の雪庇を避けて西斜面の堅雪面に屢々渡つた。午前十一時五十分遂に頂上に立つた。

來し方を辿ると何日か前に越えた大多和峠がホンの小さな窪みになつて、其の向ふは霞がたなびいてゐる。遙々と難路を過ぎて我今唯一人奥山の嶺に在りの感がひしひしと身にせまる。眺めは豊へやうもない大觀だつたが風も強いので切上げて降りにかゝる。スキーデポからの滑降は素晴らしく鞍部迄快いスラロームを描いて僅かに七分を要したのみ。太郎平を越えてスキーは矢のやうに、十五時には小屋に歸着した。

五月一日雨 天氣は遂に崩れたが、めざす頂を首尾よく踏んだよろこびに氣持は明るく、雨の中を有峰に下つて泊る。

二日終日雨 滞在。

三日薄曇 春の歩みは早い。雪の融けやうに驚かされる。夏道を忠實に辿つて大多和へと越える。村には山櫻が満開で、新緑が目にしめる様だつた。

四日快晴 たのしかつた幾日かの回想に胸をふくらませて、五月の風のさわやかな谷路をひとり、里へと下りていつた。(一九四六年六月記)

終戦後初めての立山スキー行

松村高

スキーも登山も差控へざるを得なかつたこゝ数年間の鬱憤を一度にはらした立山行の日記の一節を報告することにする。

四月十三日(快晴) 十五時から芦くら寺で開く、『立山を語る座談會』に間に合したいと、仕事を終るや直ちに飛び出したが、南宮出驛へ着いて見ると一足違ひで電車の出た後、次の電車は岩くら寺止りとのことに少々出端を挫かれた形だつた。

それでも電車が常願寺川を越える頃になると、久々で山へ入るのだといふ氣持から自ら心も軽くなつて來た。千垣から芦くら迄昔懐かしい道を辿る。農家は苗代準備に忙しうだ。

大仙坊(神官佐伯幸長氏宅)へ着くと、座談會は今から始めやうといふ所だつた。集つた顔振は、新潟富山石川福井の體育關係官、新聞記者、中野峻陽(日本山岳會員で立山登山百三十餘回といふ立山通の人)、佐伯伊太郎(佐伯房治(ブナ小屋經營者)、佐伯三九郎(内人組合長、乗越小屋主)とい

つたところなので山の話に花が咲いて夜の更けるのも知らない位だつた。佐伯房治方に泊る。

十四日(小雨後晴) ブナ小屋泊なのでゆつくり出發し蘆橋へ向ふ下を流れる常願寺の流れも、見上げる飯崎山も姿は變らぬが、久しぶりで此道を歩む自分の心は永く登山を阻まれて來た後だけに、從來の幾倍の樂しさかわからない。木々の若芽も陽光を受けて歡喜するかの様にもえて居る。

後着の連中と蘆橋杉田方に落合ひ晝食。十三時いよいよ登り始める。久し振りの登高ではありお粥腹の營養失調體力では中々こたへる。可憐な岩かきみに心を慰められ乍ら喘ぎ／＼の急登も終り、美女平へ辿り着くと、もう一面の雪早速スキーを着けたら急に子供みたいに嬉しくなつた。四時過ブナ小屋着、小屋のストープはあかあかと燃えては居たがジツとして居れず早速練習に飛び出した。

山小屋の夜は何時も乍ら楽しいストープを圍んでお國自慢や山の話に時のたつのも忘れてゐたが、

外ではブナの梢にちりばめられた星は美しく輝いて明日の天氣を保證するかのやうだつた。

十五日(快晴微風) 八時出發、スキーの滑りも軽く、立山杉ブナ林を縫ひ右に飯崎左に早乙女を振分けに眺め乍ら悠々と登る。弘法小屋で少々早目だが晝食。昨晩から腹をこわしてゐるので食欲不振間近にドツシリと根を張る藥師岳の大きな姿が私を強くとらへた

次は是非あれへと思ふ。彌陀ヶ原に入れば、天狗の小屋が見えてゐるが中々遠い。三時間もかかるのだからいさゝかがつかりする。二三日前新雪が降つた爲、シールを張つたがスキーの滑りもよく、天鰐絨の上を歩く様で頗る感觸がよいのだが、小屋近くでへばつてしまふ。暫く練へないでゐるとかうもなまくらになるものと情けなく思ふ。小屋へ着いて一休みしてから寫眞だけ持つて國見岳へ登る。傾きかけた陽を受けて一きわ鮮やかに浮出た槍ヶ岳を中心とする山なみの美しさは何時迄眺めてゐても飽きなかつたが、そろそろ雪も凍りかけて來たので、小屋迄一気に滑降したら終ひには怖しい程スピードがついて了つたが辛

じて投げ出されずに済んだ。小屋の窓に倚つて蒼茫と暮れ行く彌陀ヶ原を眺めて居ると、何と

も知れぬ想ひがひし／＼と胸に迫つて來る。殘照に頂を紅に染めた飯の壯麗な威容! 詩才が欲しい。

澄み渡つた中天に、十四日の明鏡が懸ると夢の國へ迷ひ出た様に一同月に誘はれ小屋の前で滑り出した。粉雪が月の光に飛び散る。月明に輝く銀盤を縦横にかけ廻る黒い影! 影! やがて疲れ果てて小屋へ戻つた人々の顔には、心からの満足が表はれて居た。

十六日(快晴稍風強し) 見渡す雪原を寄せては返す波瀾の様に雪煙が巻いて、走る先頭の下半身は雪煙に包まれてぼやつとぼけて見える。淨土山の大きな陰影と稜線のマールクラストが、逆光に輝く對照の美しさを、寫眞にはとても表現されるものでないと知りつつも、つひシャッターを切つて了ふ。

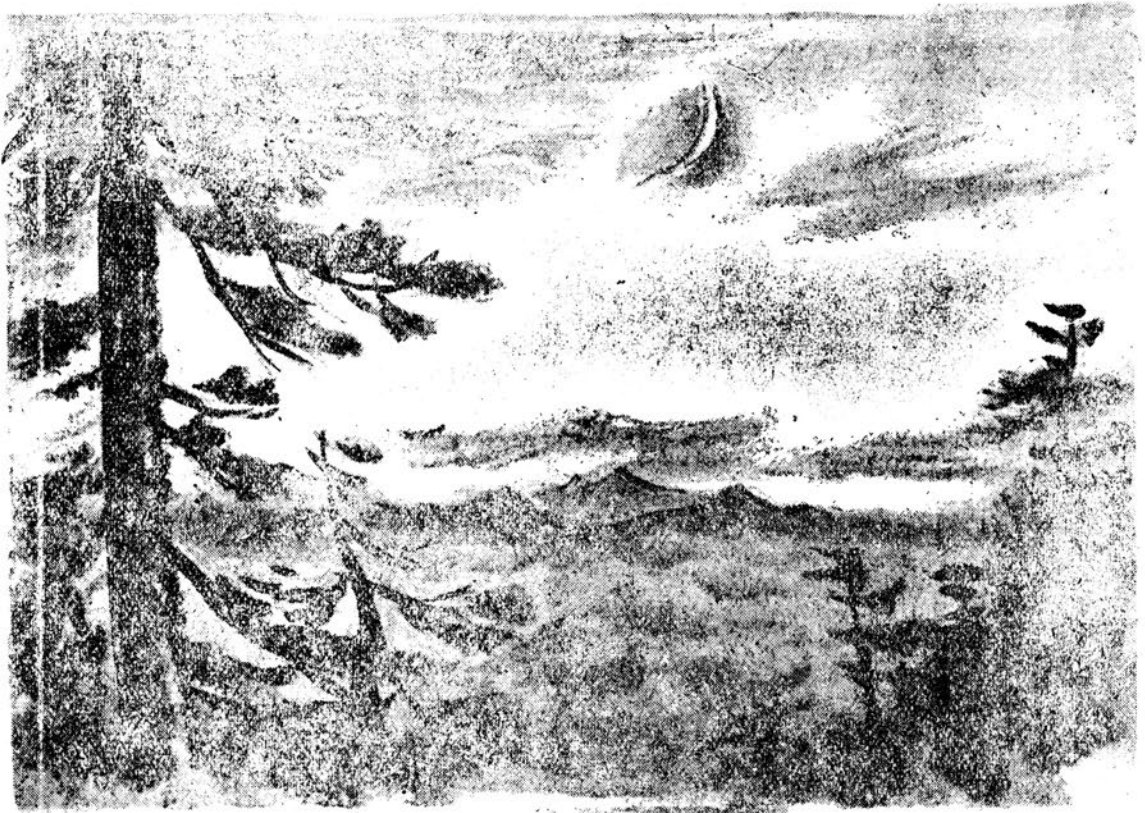
一の越附近はウインドクラストでかなり惱まされた。尾根へ出るに急に風がうなりをあげて襲ひかかつて來る。針の木から槍、笠への山なみは、綠青を盛り上げた日本畫の様な色彩で、近々と目にしみ込んで來る。

戰災でシュタイグアイゼンを失つたので、自分は登頂を斷念したが、アイゼンのある者だけ伊太郎を先頭に頂上へ向ふ。殘留組は反對に、谷間へ粉雪を求めて、スキ

ーの陶辭境に入る。廻轉又廻轉、瞬く間に堂室原へ着いて了つた。登頂組が三の越を蟻の様に登り續けて居るのが見える。強風と颯ひ

乍ら頂上を極めて下山した一行の満足は云ふ迄もない。午後は地獄谷廻りをして小屋へ歸ると、追分小屋の娘二人が顔色を變へて入つて來て、今そこで大きな熊に遭つたといふ。二階の窓から見ると足跡が點々と國見の方へ續いて居る大膽ぎして足跡を見に行くと、それは熊ではなく羚羊の足跡だつた又追分の小屋のタンクの中に兎が居た、怖いからそのまゝにして來たといふので、歸りは早速兎の御馳走になれるぞ有難いと皆喜ぶ。夜はまた満月の光を浴びてのスキーだつた。

十七日(天狗小屋雪、追分から下は雨) 起きて外を見ると、窓外はガス立ち込めて雪が霏々と降つて居る。先日の富山高校の連中の様にリングワンドルグをやる事もあるまいと、六時半小屋に別れを告げる。クラストの上に新雪が少々といふところで滑りは殊に良いが、左斜面斜滑降の長帳場の角付で足首がぶら／＼になつて平凡な所でヒツクリ返つて了ふ。追分へ着いてタンクを攫したら居た! 居た! 居たには居たが今度は兎にあらで『むじな』なり。伊太郎は



山の畫囊

から(一)

中村清太郎

爆撃にも幸に
助かつた畫囊、
それを開けばそ
こから無限の思
ひ出が湧き上る
之はその一片、
静かな山上の夕
べ、後立山のあ
る秋近い日だ。
暮れまさる大
空には底の方に
まだ残照をとど
め、新月は淡黄
に匂つて菊の花
辨にもまがふ。
山上の花野は去
來する薄霧を帶
びて、物みな灰
かに響り合ふ。
一日の仕事を終
へて火の前の夕
餉に寛ろく、こ
の一ときの楽し
さ。

すつかり喜んで案内賃よりこの方
が大儲けだとほく／＼顔。

森林地帯に入ると雪質低下、滑
りが悪くなつたが、ブナ小屋で少
憩の後美女平迄スキーで降る。

春雨肅條たる中をスキーを肩に

藤橋杉田屋旅館に荷を下ろしたの
は九時半だつた。滞れた物を乾し
て居ると今日から電車が栗巢野迄
開通との朗報が入り一同大喜び。

富山への電車の窓から、密雲深
くたれ込めた彌陀ヶ原の端のみ少
し覗はれる立山連峰を見送るU氏
とF氏(越後湯澤から初めて立山
へ来た人々)は、いかにも感慨深
いやうであつた。

後記(交通機關、小屋等の近狀)

電車 南富山初發五時二十分—
終發十七時五十二分 八往復あり
料金片道二圓
山開き 七月五日

春の鹿島槍

立教大學山岳部

立教山岳部も戦争の最後の頃十
八年の末から十九年にかけて部員
の殆んどを狩り出され學徒出陣と
云ふ名譽を負ふた若人は、學園を
後に銃を取つて出て征つた。遂に
部員は二、三名に減じ登山團體と

食糧 米持參のこと、本年は小
屋へ米の配給なし

宿泊料 二〇圓—三〇圓

案内者 伊太郎、七藏等約三十
名あるも豫約しないと都合のつか
ないこともあらう

案内料 五〇圓(一日分當り食
糧五合雇主持參のこと)

案内者申込場所 芦くら寺立山
讚仰會又は同栗巢野出張所

収容力 室堂三〇〇 天狗小屋

一六〇 追分小屋一六〇 弘法小

屋一〇〇 ブナ小屋一六〇 銀御

前一五〇 銀澤小屋一〇〇 五色

小屋一〇〇 平小屋一六〇 大日

頂上小屋七〇 立山温泉六〇〇

夏の間は各自持參の米味噌等の
食糧は栗巢野驛前連絡所で切符と
引換へ、その切符を山小屋へ持參
して小屋に準備の現物と取換へる
便法が取られる筈である。

しての行動は出来なくなり山岳部
を一時閉鎖してしまつた。想へば
創立以來二十一年の短い期間であ
つたが日本の登山界の爲に多少の
足跡を残したつもりである。終戦
後復員學徒も學園に歸つて來たが

十九年の秋頃から始まつた猛爆撃の爲に山岳部の唯一の蓄積であり財産であつた山の道具や、山岳圖書、地圖及歴代の部員の書き残した尊い研究や紀行の原稿の大部分は灰燼に歸してしまつてゐた。唯ザイル四本、夏冬合せて四張の天幕、寝袋四つ、その他少々のもものが焼け残つたのである。この無一物の部に再建の聲が近頃起つて來た。昨秋から今春にかけて、山への憧れを持つ學生が次第に増加し残つた部員を合せて登山愛好の學生十數名を得たのである。六月廿二日頃復活第一回の部員並に先輩との會合を開き滿場一致で部の再建に邁進する事になつたのである。

紀行

の部の行動を見守つて戴きたい。次の紀行は終戦後の部員の山行であるが、記録としては取るに足らぬものとしても、戦後の春山の記録としたら新しいものであり、山の事情不明の折からでもあるので報告する事とする（濱野正男、二一、六、二四）

であつた。食糧として一日三合とし一升五合、副食として味噌飯盒一杯、野菜罐詰少々より他課達出ななかつた。装具は冬ウインパー、テント五人用一張。靴はスキー靴、アイゼンは八本爪、ザイル三十米二本、以上である。参加者、吉川（學、二）飯田（豫三）田中油井、中村（豫二）

たのである。西侯から雪があり笹喰附近は相當の雪であつた。輪螺とアイゼン併用でクラストした雪面を一步一步踏みしめながら六時三十分鎌尾根の取り付に着いた。この頃からガスがかゝり始め、雪崩の音がガスの中から轟然と聞えた。油井は多少恐怖を感じたらしい。小憩の後澤をつめる事にきめ六時五十分デブリの上を登り始めた。大きな雪塊が重り合ひこの登高は甚だ疲勞を感じた。二、三〇〇米附近にまで登つたがガスは愈々濃くなり前方も見えなくなつた。更に時間も遅くなつたので、雪崩の危険をさげ二、六〇〇米附近迄登つたがガスは全く視界をさえぎり何も見えない状態となつてしまつた。そこで赤岩に取り付く事とし八時十分、元に引き返しアイゼン輪螺を外し九時三十分赤岩に取り付く赤岩は岩が露出し歩きにくい。一時間に雪になつたが雪が解け始めたので歩きにくくアイゼン輪螺を付けた。十一時晝食、二時五十分國境線下のフェイスの前で赤岩班の三名に追ひ付いた。直ちに一緒にになり鎌尾根班が先頭となりトラバースした。

前に迫る銀の偉容に壓倒されて、暫らく腰を下ろし見惚れてゐた。遙か遠く銀の向ふに日本海が眺められた。二十分ばかり休み、冷小屋に四時四十分着いた。小屋は完全であり、半分程雪に埋もり、燃料はなく僅かに炭が残つてゐたのでそれを使用した。

十九日（吹雪） 滞在。

二十日（快晴、強風） 五時起床、猛烈な風が粉雪を吹き舞ひ上がらせ、吹雪の様だつた。六時四十五分頂上を目指して出發。強風なので、初心者爲にアンザイレンする。雪庇は四米程張り出してゐた風さへ無くば快きの登高が出来たらう。寒氣は身を覆ひ手の感覚も失ひ勝ちであつた。八時二十五分全員登頂した。北嶺に足を伸しかつたが食糧不足のため残念だが引き返へした。冷小屋九時五十分、小屋の清掃の後十時四十分小屋を後にした。赤岩の頭二時十分つくく、銀の姿を眺め、名残りを惜んで馳せ下る。一步信州側に足を踏み入れると嘘の様に暖かく、春風が頬をなぞる。うららかな春の陽が私達を包む。満ち足りた氣持で尙も氣を引き締め足を引きづりながら西侯に下る。四時二十分大冷澤で喉をうるはし天幕に着いた。（二一、六、一九、吉川潤二記）

究し練磨する機會もなく、山の知識も後れた部員が構成する山岳部は直ちに五、六年前の様な登山様式をとる事は出来ない。二十年前の近代登山の始まつた頃の登山から始めねばなるまい。更に食糧事情、經濟事情等からこれから山に行かうと考へる若者の前途は二十年前の登山者よりも更に苦しい道があるに違ひない。私達卒業生は部員諸君が着實な足元から練り始め十年、二十年後に更に輝しい登山と成果をあげて再建日本の若人の意氣を示してくれると希望を持つものである。各位も長い目でこ

私達は全く山の初歩技術から再發足し、五年、十年後のヒマラヤ遠征を夢みて、逐次程度を高め、より高峻な山岳に困難な登攀を敢行し登山の經驗と技術の練磨に精進する積りである。然し現在の四圍の客觀的狀態即ち食糧の不足、裝備の缺如等々色々な障害に直面し、それ等と取組まねばならないこれらのあらゆる障害をのり越えて山に登ることは敗戦後の山岳愛好者たる私達の宿命なのである。そこで新入部員に春山の概念と雪の山の知識を得させ又、私達も研究する目的で三月下旬鹿島大冷澤二俣出合附近の炭小屋を根據地として約一週間の合宿を行つたのである。この合宿は参加者が減り更に大いなる成果もなかつたので第二回目を計畫した。

五月十七日（曇） 松本で連絡悪く大町に着いたのが十一時十五分直に二つに分れて先輩薄井氏の宅に挨拶に出かけた仲間を町端れで待合せた。曇つて鹿島は見えないが、樂に歩けた。その日は冷澤沿ひに西侯スキー小屋附近の河原に野營した。五時四十分である。造林小屋は無くスキー小屋は全く倒壊し使用出来ず二俣に炭小屋が二三建つてゐる程度である。道は二俣まで自動車道路があり、二日に一度位は入る様である。

十八日（雨、時々晴） 目覺しもなく寢過し、三時起床、直ちに炊事に取付かり食事の後一食携行前後半よりの雨は上りさうなので小雨の中を電氣をたよりに四時十分出發、西侯四時三十分着、こゝから二バアティに分れ吉川、油井、鎌尾根、他は赤岩尾根に向つた。赤岩班は全部初めてなので少し心配はしたが各自の自信をつけさせる爲と、研究させる爲に出したのである。

初心者が多いのでアンザイレンして慎重な登高を続け三時二十分國境尾根に出た。黒部側は晴れ眼

晩春の赤津山（其二）

佐久間 惇 一



二王子岳（一四二・一米）の頂に立つて飯豊連峰を望む時、胎内溪谷を距て、大日嶽から秋差嶽に続く飯豊主脈の大綱に眼を奪はれると共に、耕取倉山と勘左衛門倉を胎座に控へて胎内源流に立つ赤津山（一四〇・八・一米）の幅のある悠揚たる巨大な姿に、この山塊の奥深さと容易に近づき難い錯雑な山貌に魅せられずにおられない。私の赤津への試みは今度で四回目である。昭和十年七月中旬、内倉川入り、勘左衛門倉の中腹に露營、翌日勘左衛門倉三角點を越えて進んだが、あの籠目に編まれた様な藪に意外の時間を費し、雨に降られて第一回の敗残の姿を曝したのであつた。

翌十一年十月下旬には、赤津を日差して單獨に出發の儘消息を絶つた大倉長の丈先生の搜索の爲、二王子岳御手洗池に募營の後、冷めたい晩秋の曇の中を二本木山迄達したのだが、初冬の悪天候と前途の恐怖の爲前進を肯じない人夫

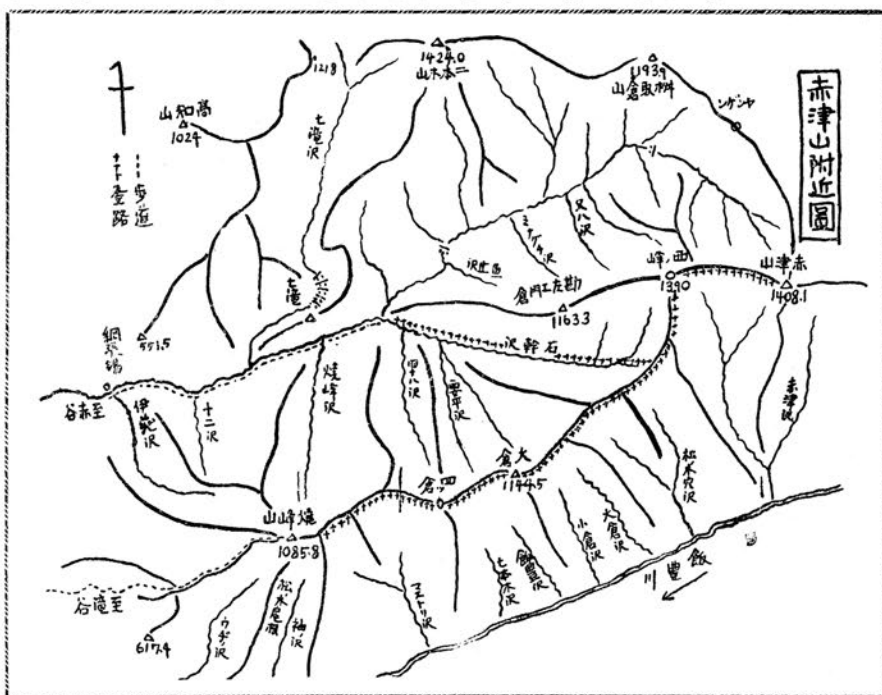
の拒否に逢ひ、赤津の何處かに私等の手待つ大倉氏を求め得られぬ想ひに噴まれ乍ら、空しく引返して來たのが第二回目であつた。

第三回目は物凄く藪の勘左衛門倉より取付くのを避けて内ノ倉川の石幹澤雪溪をつめるべく同十四年五月初旬常磐炭小屋に一泊、石幹澤中流まで入つたのだが、林道に残つてゐる堅い残雪のへつりの悪さに思はぬ時間を取り、その上雨にも降られ、遂に此の行も斷念を餘儀なくされたのであつた。村の人達の話では内ノ倉入りは八十八夜前後が適期とされてゐるが、早ければ林道の雪のへつりと雪崩の脅威に曝されるし、遅ければエキト（雪溪を指す地言葉）があき、藪の高廻りが續くのである。峰傳ひは登降に大きな努力を要するにしても、残雪が多ければ、比較的

らして、四月廿六日を出發としたのであつた。

しい。赤谷驛の櫻は満開であつた。戦厘の夢に幾度か飯豊川を繞る雪山

赤津山附近圖



第一日、昨春は、おおつびらにピッケルを持つて驛に行くのが後めいた氣がしたが、今年は落ちついた氣分で人ごみを歩けるのは嬉

い旨の眞新しい立札がせちがらく立つてゐた。瀧谷部落は梨、櫻杏が一時に咲いて越後の山村の春は實に鮮かに美しい。無難作に點在する茅葺の農家の間をクルクル廻る迷路の様な道を辿つて村頭から林道に出る。

焼峰道の杉林に入るとちらほら足許に残雪が踏まれる。あたりは新緑の世界、新芽の色とりどりの形態や艶やかさが生長の悦びを歌つてゐる。朴の木のかつくりした大きな新芽越しに先日登降した俎倉山から馬鬚、棚橋山に續く尾根が大きく延び上つて来る。あの荒々しい岩壁に刻みこまれた雪溪も指差して語る今は懐しい親しいものを感じさせる。夕餉の足しにもとゼンマイ、トリアシ、アザミ等を採り乍ら行く。こんな處に山櫻があつたかと思ふと、晴れ上つてチカ／＼する程の蒼空に辛夷の白花が浮ぶ。

乗越の手前迄來ると斜面には残雪が多くなつて所々に現はれた徑には雪解けの水が靜かに走つてゐる。乗越から見る焼峰も蒜場山も馴染深いながら何時も眞新しい魅力を持つて現はれる。逆光にぐつと立つ蒜場山は豊富な雪に埋められて、小侯の澤を抱く様にしてそ／＼立つ。焼峰の第一、第二の急坂は雪が落ちぬして徑が現れ

てゐた。岩壁に取圍れたウジノ澤の底はすつと雪がつまつてゐて、その立上る様に急な雪溪には處々デブリと雪崩の際痕が荒々しく、未知の此の澤々に激しい潮登への意慾をそゝられる。

ウジノ澤側の掘み場は、岩骨露はな急斜面にガレ徑は荒れ、雪が窪みに張りつき汪濶に出来ないの尾根道に避けた。頂稜直下から清水竈にかけてベツトリと一面の雪斜面で、割れかけた大きな雪庇が冬の激しさを思はせる。足許から殺ぎ落したやうなウジノ澤を見乍ら焼峰本峰に登らず尾根左斜面の雪を傳ひ伊薩澤源流を詰める。

二王子岳裏側のなだらかな稜線に、豊かな雪が盛り上つてゐる。ト(雪溪の地言葉)を割つた小戸の七瀧の音が木霊して聞えて来る伊薩澤源流はすぐだ。源頭に立つと足下の焼峰澤を距て、内ノ倉川から思ひ切りをより立つ勘左衛門倉尾根には、雪は大平落ち盡して、山毛櫨の鮮かな新緑が美しく彩り、その左の掛取倉山の長大な尾根の奥に鉾立峯と杵差嶽が顔を出してゐる。勘左衛門倉から盛り上つて續く赤津は未だ冬の姿で、石幹澤奥には之から辿らうとする尾根が遙かに白く光つてゐる

源流から焼峰北斜面の雪を傳ひ三角點の先の鞍部に出て食事を攝る

陽さしがボカ／＼として暖く、春の氣が鶯の囀りと共に、谷間から上り、緑の觸角が下から白い雪を次第に縁どつて行つてゐる。それでも遠い飯豊主脈の頂稜には霧水の白花が飾られてゐるだらう。さあ、出發だ。これからは未知の山だ。飯豊川と内ノ倉川の分水嶺の此の尾根にはどんなものが待ち構へてゐるか、前途への不安と登高への意慾が溢れてくる。アイゼンをつけて袖ノ澤の頭へ雪堤をたどる。頂の直下で雪は盡き藪をこいで頂に出る。此處まで来ると赤津への尾根續きか一望の裡に眺められる。地圖にも相當に隆起が描れてあるがなんと起伏の多い事か。裾を引いてどつしりとした大きな姿の師走澤の頭迄たつて容易な登降では済みさうもない。その後ろに未だ葉の出ない樹に縁どられた起伏が、或は傾き、或は高く、重疊として續いてゐるのだ。

赤津はと云ふとその奥に白い圓頂をもたげて、近づき難いもののやうに静まり返つてゐる。『遠いなあ』といふ聲を耳にして追ひ立てられる様に藪を鞍部へ下る。其處には飯豊川への露はな削壁を現はした瘦せた岩峯が低い乍らも切り立つてゐた。つるやヤドメの藪に惱まされ乍ら、岩尾根を緊張して越えて行くに尾根に幽かな踏跡

がある。焼峰北側から續いてゐる徑らしい。細い針金の兎わなが残つてゐた。徑に乘る嬉しさは格別だが、それも僅かの間の事で直ぐ消えてしまつた。冬の北西風は尾根にぶつかつて飯豊川側に大きな雪庇と雪堤を形づくり、それが崩落しかけた斷層を見せたり、ナイフリッジがあつたり、クレヴァスが出来てゐたりして困難な箇所も多かつたが、それでも藪を避けて出来るだけ雪を拾つて進んだ。五萬分津川圖幅にある焼峰以東の二つの隆起は殆んど雪に蔽はれてゐた。これらの雪稜は七、八十米の登降だが、登つただけ下らねばならぬのが惜しくて堪らないのであつた。朝から風はなく稜線は暑くて無暗と雪を囁つた。薄雲が徐々に北から廻つて来る。飯豊川南斜面から時々雪崩の音が遠雷の様に響く。一、二度近くで雪煙をあげて落ちる雪の奔流を見たが、雪不足のせいか大きなものはあまりなかつた。

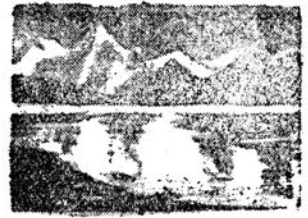
今迄北東に向つてゐた尾根は、四十八澤の源流から東北に曲つて大きく隆起して師走澤の頭となりその左肩に大倉の頂が黒々と續いてゐる。四十八澤、晏平澤、石幹澤の源流や、急な支尾根には山毛櫨の樹林が灰色に浮いて見える。飯豊川に比して大きな樹の多いの

は流水切りが入らなかつた爲だらうか。北側であるせいばかりでもなからう。師走澤の登りは廣い雪尾根だつた。もう雪も少なくなつた。漸く登り切ると登つただけの二百米を、膝迄埋まる雪稜を又下らねばならぬ急な長い下りであつた。飯豊川から入聲がする。立止つて耳を澄すと、耳鳴りのするやうなしじまの中に、微かにホイイと呼んでゐる様に聞えて来る。都澤にでも入つてゐるマダギ(獨師)だらうか。思ひ切り大きく、『ヤッホーオ』と呼びかけてみたが木霊が時間をおいて、低く返つてくるだけであつた。

大倉の登りは約百四、五十米であるが、師走澤の頭に立つて眺めた時に感じた程長くはなかつた。雪の中に鳥の様に残つてゐる黄楊や檜の矮小な藪の中に三角點があつた。薄い雲が徐々に二王子岳の大きな山肌を這つてゐる。深い谷越に立つ鳥帽子山にも各筋に陰が出来て、蒸場山は頂上から馬刺峯に延びた尾根が大きく現はれてきて山容は見馴れぬ山の形になつてきた。もう三時を過ぎた。泊場を探さねばならない。幅のある二、三の雪稜を上下して、雪庇の下を掘りだして行くと、廣い斜面に風雪に益殺の様な技振りになつた木が群つて立つ二ツ倉第一峯の雪

頂である。これを巻く様にして下つた鞍部に半坪ばかりの平があつた。飯豊川側は廣い雪堤で尾根には大きな樹が立並んでゐる。荷を置いて附近の泊場を探したがよさそうな場所もない。この鞍部は松の木穴澤の源流で、恐らく風の通路かも知れぬ。併し雪の上にも寝たくもないので此處と定めて早速設営にとりかゝる。携帶天幕二枚を屋根形に張り、内ノ倉側に一枚風除けに結びつけ、中には柴のうら木を積み上げる。夕食は握食で済ます。夕照は蒸場、二王子を刻々と紅から紫に染めて夕闇は磐川の微かな響と共に俯ひ上つて来るどつさりある枯木も、地面が濕けてゐてさつぱり大きな焚火にならないもどかしさ。遅くなつて漸く二食分の飯も汁も出来上つた。風も大して無く、温度は七度。石幹澤側の地盤が下つてゐるので平に寝られず不安定であるのと、素足が案外に冷えて、ウト／＼しては又眼が覺める。天幕を拍動する風の音が獸かなにかの訪れかと思はせる。十一時頃雨の音に淺い眠りを破られ總てを天幕にとりこむ。

焚火から出した水筒を湯タンゴ代りに抱き乍ら、たゞならぬ雨に明日の行動を想ふ事頻りであつた。風と共に去りぬのスカレットではないが考へるのは後にしよう、疲労は限りへと誘つてくれる(續)



清津峽への道

板倉 黎子

梅雨を思はせる雨が夕刻になつてやつと止んだ。この分だと明日は宿の人達に交じて飯士山の裾野へ蔵とりに行けると、楽しみにして床についたのだつたが、こたつに火を入れた来た宿のばあ(老婆をこの邊ではかう呼ぶ)の梯子段をとんゝとんゝ上る足音に眼を醒ますと『また雨だて山へは行かんねえ』と云ふ。やがて六月だのにこゝ越後の山村では朝晩が冷えこんで、なか／＼炬燵がしまへない。足の先がほか／＼していき、氣持だと思つてゐるうちに夜着を鼻の上まで被つて眠つて了つたものと見える。再び眼を醒ました時はカーテンを透してもう遅い朝の陽が部屋一杯にさし込んでゐた。

洗面道具を手に入れた下へおいて大きい圍爐裏の切つてあるだゝつびろい臺所を覗くと、ばあがたつた一人、寛で山水をひいた流し端にしゃがんで何かやつてゐる。子供

等は學校に、『ツアマ』(父親)や『あに』は野良へ出たのであらう。箱膳の上にはまだ茶碗や、皿小鉢が乗つたまゝになつてゐる。『チャチャ』(母親)と『アソネ』は今しがた山へ行つたと云ふことだ。置いてきぼりを食つた私は蔵とりを斷念して十二峠を越え、清津峽を覗きに行つてみようといふ氣になる。

焼むすびを二つ貰つて宿を出たのは十時半であつた。やはり天氣は定まらない。急に日が蔭つたと見る間に田圃の表面には、いくつもの小さい波紋が後から／＼次々に擴がつては重なり合つて消えてゆく。しかしそれとてもものゝ十分とは續かない。どの田ももう畔塗りに済んで、枝豆の植ゑられるのを待つばかりである。苗代の苗は一寸程に伸びた。少年が馬の口をとり、父親らしい人が頬被りで鋤具を押さまへ、大股でジャブ、

／＼水を切つて田掻きに忙しう姿も見えない。かうした眺めが暫く續いて、やがて油障子に『とうふ』とか『コンニャクアリ』とか書いた店だの『月影夢子熱演青春哀史』大人三圓小人一圓五十錢といふビラの貼られた芝居小屋があつたりする町並へ出る。石打驛はすぐそこだ。線路沿ひに湯澤の方へ少し戻ると、一棟二戸のスレート屋根の鐵道官舎が建ち並んで或る家の軒先にはお櫛櫛が干してあり、隣の家の玄關の三和土には木馬の乗物が置いてある。番人のゐない踏切りを渡れば、また道の兩側は田圃と農家はかりになる。十五分程で上野(うのはの)嶺泉、農家まがひの湯宿が散在し、左手の小山の上に見えるのは見晴館、とつゝきの道の左側のはブリキの看板に古湯とある。いづれも主として農閑期に近在のお百姓が、鍋釜持參で湯治に来るところだ。道が稍左にカーブしたと思ふと右に中の湯に少し先の山腹にひつそりしてゐるのが奥の湯である。十二峠へ登るには、奥の湯の少し手前の杉林の中を右に折れて山徑にかゝる。林は間もなく盡きて小黒川の水音が耳に近い。斜面のそこ／＼に見える薄桃色の花は空木である。徑は小黒川を右に渡つたかと思ふとすぐ左に越してゆく。橋はないが川

幅は一間餘、流れも淺く大きな石が所々に露出してゐるので安定のよさ／＼うなのを拾つて飛んで渡れば靴を濡らさずに済む。正面に横たはる青草の丘陵の稍窪んだあたりに、大杉の三四本かたまつて見える所が十二峠、左に少し離れて小高いのが高津倉山だ。足もとには重たなばが咲き、新緑の中に野生の榛の紅が目立つて、その葉はつや／＼光つてゐる。左の峠の澤は半ば雪で埋まつてはゐるが、もういくばくもなくして消えて了ふ運命にあるのか、断面は縞をなし、表面は落葉枯枝泥によかれ、細つた流れがその下を潜つて／＼音ばかりが聞こえてゐる。やや暫く目指す峠は小隆起の蔭に隠れ、フタマイイチゲの白色の群落の間を縫つてゆく。左の谷の木の間にぐれに、瀧ともつかず水量の乏しい水が二丈ばかり落ち下つたところに出るあたりから、周囲の灌木は草地に變つて程なく峠の頂に達する。正午に近い。白ペンキの大きな棒杭には『六日町土木派遣所管内』と記され、こゝが南魚沼、中魚沼の郡境になつてゐる。僅か許りの平地には一坪程の小祠が中魚沼の方を向き、その右の足鉾前の掛つた炭倉庫、左にある二本杉の巨木に挟まれた十坪餘の建物は、軒も傾き床板も大方はがれた

廢屋で案内書に『峠の茶屋』とあるのゝ名残りであらう。中に入ると圍爐裏の跡もあるが隅つこには空堀や瀬戸物のかけらが埃を被つて轉がらつてゐる。今から十年ばかり前迄は冬期を除いて番人も常住し、酒なども商つてゐたとか。中魚沼は炭の産地、村人達は炭俵を馬の背につけたり、自分の肩に擔いだりしてこの十二峠を越えたらう。私は蜘蛛の巣だらけの庇のかげで想像する。彼等は炭を賣つた代金で食糧と、家に待つてゐる子供等に土産を買ふ。雪でも降りさうな空模様、一汗かいてこの峠の茶屋に辿りつけば圍爐裏には常火がパチ／＼燃え盛つてゐる。暖も暖い。久しぶりで一杯やる地酒のなんとまあさうな。酔ふほどにおくに自慢の佐渡おけさや三階節も飛び出して時の經つのも忘れて了ふ。

ポーツと汽笛がなつた。今來た方を見下ろすとならかな飯士山の裾、魚野川と上越線の軌道が平行に走つて、通つて來た田圃のあたり越後平野の一角は鏡の面のやうに光つてゐる。左手に遠く、山麓の悉く雪を挟んで一きわせりあがつてゐるのは八海山に魚沼駒に相違ない。また灰色の雲が頭上に擴がつて次第に飯士山の方へ移動してゆく。さや／＼雫を降ら

す風も冷い。ふりかへれば左方に苗場山が堂々たる姿を見せてゐる。こゝから、見下ろす谷の半分は楓橋、残り半分は杉と檜が斜面を埋め、明暗の對照が面白い。鶯の囀りに交じつて蛙のゲオム、いふのが風に乘つて来る。握飯を食べて峠を後にする。雪害でどの木も根元が同じ様に曲つた林を抜けて、シヤウジョウバカマの咲く濕地を行く。皮をはいだばかりの杉丸太が溝の間に轉がつてゐて、狭い傾斜面に無理して作つた田が見えて来た。形は様々、階圓形、丸味を持たせた三角、中には千鳥形の迄ある。紺の野良著で畑仕事の人の姿が豆粒位に見分けられるやうになつて来た。やゝ降ると倉下の部落だ。村外れの墓地の石塔の上では、黄色い胸毛の鶴鶴が頻りに尾を振つてゐる。小さな木片を寄せ集めて作つた怪しげな橋で倉下澤を渡ると道は程なく上りにかゝり細流が何回となく行手を横切る。赤子の拳大から小さいのは小豆粒位の澤山が石の蔭にひそむ。道端の藜の苔はすつかりはけて忘れられた姿は淋しげである。道は電光石に青草の山を越え、だら／＼と下つて三筋に分れ、左の道を砥澤について降ると間もなく一塊の人家が視野に入つて蘗澤の部落に出る。眼の前の清津川はもうこの邊

ではゆつたりと落つきを見せ、對岸の懸崖には藤の古木が散り際の花をつけてゐる。萬年橋といふ釣橋を渡つて左折する。平坦な氣持のよい道、右は岩質の山がおほひかぶさり、道路はトンネルに入る、二番目のトンネルを出たところで清津川の流れば大きく山の鼻を廻り、一たん別れて中に小砂利の洲を圍んで合流する。水は青くすきとほり、底の小石も數へられる程だ。眼界が展けたと思ふと、行手の谷合ひに見える石置屋根が小出温泉だ。こゝも質素な山の湯宿には違ひないが、張り替えたばかりの障子に、あたりの若葉の緑が染まつてゐるやうに思へた。時計は二時を少し廻つてゐる。依然雲の往來は烈しい。

川河原から見上げる、眞夏の強烈な太陽にキラ／＼輝く奥又白の岩と雪のコントラストに、雪溪の縁ぞの幾何學的な線に限りない情熱を燃やし、闘志を掻き立てられる。また氷河に蔽はれたヒマラヤ

歪められた登山思想

浦松 佐美 太郎

會報一三五號に載せられた冠さんの『歪められた登山思想』といふ一文を拜見しましたが、これは色々の意味で重要性があると思ふので、敢てこの一言を呈したいと思ひます。

『歪められた登山思想』と言はれますが、登山思想とは如何にも洒落た言葉ですが、それでは登山思想とは一體なんぞでせうか。そんな思想があるのでせうか。歪められるにしても、歪められないにしても、登山思想とはどんな思想なのか、そんな思想が一體世の中にあるのか、それが分らなければ、これは洒落にもなりません。如何にも氣取つた言葉で、解の分つたやうな、その實何のことか分らない、こんな言葉を、そもそも表題に使はれることは少し輕薄に過ぎたやうに思ひます。事實本文中で冠さんが登山思想と言はれてゐる

と雖も登山といふことが、冠さんの言はれるやうに變つてしまつたことは全然ありません。これは極く一部の人がそんなことを主唱し又一部の人がその尻馬に乗つてそんなことを言つてゐただけのことです。戦争でない時でも、登山とは、自然と人間が一致することだ、登山とは植物の採集をしたり民俗學の研究をすることだと言つてゐた人もある位です。戦時中に、日本の登山界が、登山をそう決めてしまつたやうな考へ方は冠さんの誤解と思ひます。この點は大事なことを思ひますので特に念を入れて申述べた次第です。

それから、今私が引用した文章の後半で、冠さんは自然を味ふことに重點を置いて、前半と相容れないやうに述べられてゐますが、自然を味ふといふことは、冠さんのお考へのやうに偏狭なものではなく戦闘の最中にだつて十分に味へることゝ私は考へます。ですから、戦争を遂行するために山に登つたから、當然の歸結として自然を味はないといふ斷定をなさるのは、これは少し亂暴な獨斷論だと思ひます。

ですから冠さんが、それに續いて『如斯は山を練兵場と等しく心得山を手段として利用し行動したのであつて、眞の登山とは全くか

「離れた登山運動である」と言はれてゐることは、意味が通じない議論になつてしまつてゐます。山の自然を味はないから眞の登山でないのか、それとも山に鍛えるのだから眞の登山でないといはれるのか、さつぱり要點がはつきりしません。それで冠さんが眞の登山といふのは何か。冠さんはそれに續けて次のやうに言はれます。

『私等の登山といふのは山を手段とせず、これを相手として目的とし、その表現する大きな自然の中に私等の全身全靈魂を打ち込んでゆくそれが主なるものである』
 先づ私は、この冠さんの一文が日本山岳會々報に載つたものであるといふことを重視します。その中で、『私等』といふ言葉を使はれたことは、中々大切な點だと思ひます。私は冠さんにこの言葉から等といふ複数を現はす文字を取つて頂き度いと望みます。私等と冠さんの言はれた中に、日本山岳會の會員が含まれるやうに解されるのを恐れます。何故冠さんは、私といはずに私等といはれたのか。これを私と改めて頂き度い所以を次に述べませう。

冠さんは、前に引用した文中にも、山を手段とする云々、又今の引用文中にも山を手段とせず云々といはれてゐますが、山を手段と

するとは一體どういふことなのでせうか。これも氣取つた言ひ方でありながら、さつぱり眞意の分らない言葉です。若し極く普通に使はれる手段といふ言葉の意味で解するなら、山を手段としたところで、登山が成り立たないとは思はれません。山を手段として、十分登山が出来さうに思はれます。

それよりも冠さんが、山を相手とし目的としといはれる方が變です。相手とは對立することです。目的は對立ではありません願望です。ですから同時に、相手としたり目的としたりすることが出来ようはありません。そこを放れ業です。その上、冠さんは全身全靈魂を打ち込んでゆくのが登山だと言はれますが、これも如何にも感

激口調ですが、何のことが意味が通じません。若し勝手にこれを翻譯して見れば、或は山に全身全靈魂を打ち込むことを目的とし、山を相手としてこれに登るのを眞の登山といふまでも言はれるかも知れませんが、これでは益々意味が分らなくなります。

それに續けて『これは單獨行が最もよく、良きバアテイの場合も亦よい』といふに至つては、愈々恐縮せざるを得ません。恐らく、全身を打ち込むのだから一人で登山する方が具合がよく、又多數で

行つても氣が揃つてゐれば全身を打ち込むことが出来ようといはれるのでせうか。これでは登山の意味を逸脱して神がかりです。

更に冠さんは續けて、『自由に山に登り、山の快味を味ひ、山の自然に味到する』のが登山の意義だと言はれますが、これでは冠さんの解される登山とは、色々手段だの目的だの相手だの言はれましたが結局は、山の快味を味ふことだといふことに落ちてしまひます。

もう一つ大事な點は、冠さんが自由に山に登りといはれてゐることです。自由といふ言葉の解釋を私はこゝに致しませんが、自由が流行するからとて、自由に山に登ることが登山の本義なりなどといふことは流行らせたくないと思ひます。日本山岳會の今後の行くべき方向に付いても、この點は大事な點と思ひますのでこの言葉の濫用をお互に氣を付け度いと思ひます。

私は冠さんが登山といふことをどう考へられてゐるかに付て、冠さんの言葉を引用しつゝ意見を申述べて來ました。そして冠さんは自由に山の快味を味ふのが登山の本義だといふ考への上に立つて、戦時中に一部の人の間に唱へられたといふ山に鍛えるのが登山道だ

といふ考へ方を非難されてゐますが、『その當時全國の登山團體を打つて一丸となし、下から盛り上げる山岳人の力を以て青壯年の心身を鍛錬し非常時局の資に供せんと企てた全國的運動が、何時の間に官僚によつて軍部によつて歪められ』た爲めに『元來自由であるべき新鮮である筈の各人の山岳に對する態度が一時的とは云へ屏息してその跡を絶つたかの感があつた』と憤慨されてゐます。

私は會報一〇〇號に冠さんが日本山岳聯盟とかいふ團體を作るため一生懸命になつて書かれた論文の載つてゐたことを記憶してゐますが、引用しました憤慨の件は、この日本山岳聯盟のことゝ察します。若しさうとすれば、日本山岳聯盟が冠さんの思ふやうに成立してゐたら、冠さんは『下から盛り上げる力を以て青壯年者の心身を鍛錬し』てゐられたのでせうか。さうとあれば、冠さんの登山の御解釋とこの鍛錬とはどう融和されるのでせうか。私は益々冠さんの眞意が分らなくなりました。

ですから、冠さんが、元來自由なるべき登山思想が蔑視されたとか歪められたと憤慨されてゐるのを拜見して、これは思想の問題を扱つてゐられるのではなく、冠さん御自身の山の登り方に付いて問

題を論議されてゐるのではないかと感じました。私が最初に思想といふ言葉を使はず、山の登り方としたら分りいゝと申したのはこのことです。

冠さん御自身の問題はいゝとして、私が問題としたいのは、日本では登山家が誰も彼も屏息してその跡を絶つたといふ様な大げさな書き方をされたことです。勿論、『感があつた』と冠さん御自身の感じを述べられてゐるのだといはれゝば、御解釋の誤りでせうと申上るだけですが、それにしても、もう少し細い心遣ひの言ひ廻し方をして頂きたかつたと思ひます。これも大事な點なので申述べた次第です。

そして『やがて山岳界も一陽來復の曙光を見、本來の道を辿り得るに至る』といはれたのも、今私が述べて來たところに連がりのあることで、冠さん一人の主觀としてなら見過せますが、さもなければ大變可笑しいことと思ひます。本來の道を辿り得るに至つた者は誰か。私はこの質問を冠さんに呈上致します。

最後に冠さんは取つて付けたやうに英雄閑日月ありと言はれますが、これは何を意味しますか、これは御説明を御願ひ致し度い不思議な言葉です。

私はこゝまで筆を進めて来まして、冠さんに結論として申上げたことが思ひ浮びました。それは言葉に感はされないやうにして頂き度いことです。不必要に意味のはつきりしない言葉や、氣取つた言葉を使はれて考へを混亂されないことです。簡単に言へることは簡単に考へられたら間違が少く、そのため多くの人に誤解を與へることもないでせう。冠さんは、日本の山岳界では或る地步を占められた先輩です。それだけに言動は慎重にして頂き度いと思ひます。

思ふことを、思つた通り簡単に思ふことと言はれるのが何よりと思ひます。そして率直に申上げれば冠さんは、日本山岳聯盟で十分経験されたことでよく御解りのことと思ひますが、思想だの意義だのといふ様なことに手を觸れられないのがいいと思ひます。冠さんが日本の山岳界に於て獨目の地位を占められてゐるのは、異部に對して注がれた情熱です。その情熱が高く評價されてゐるのであつて、私は冠さんの登山の理論や登山の仕方が高く評價されてゐるのでないことは、嘗つても『異部』といふ本の出版された折に申上げた筈です。冠さんは異部に注いだ情熱の焰を、それだけを大事に今後も守り育て、頂き度いと思ひます。

私は、それでこそ山岳界の先輩としての冠さんが、何時までも光つてゐるのだと信じます。

愛讀書から

四半世紀に亘つて苦心蒐集した山の本は、ほかの本と一緒に、東京の一隅で見事に灰となり、京都で安閑としてゐた自分の手には旅の身の座右に携へた僅かばかりの本が残つた。その中にシャル・ゴオの『萬年雪と氷河のほとり』がある。残つた本は、たとへ粗末でも大事によむ。よむで氣に入つたのを、ひとりでのたのしむよりも横のものを縦にしてみる。

藤島敏男

野營

鉛色の雲が重苦しく空を蔽うて空はその重みに堪へず、大地へ裂け落ちるかと思はれた。景色のどんよりした雲は、私達が黙つて登つてゆく氷河のどんよりした灰色の單調さを反映してゐるやうだ。宿望の山頂のまだ誰も知らない困難に向つて、この悪天候を肩してまでも、かうして頑強に登つてゆく私達は、心の中で惱んでゐた。

けれども必要とあれば、いつでも抛棄するだけの判断力を持合せゐるのを知つてゐたから、誰もその悩みを口に出さうとはしなかつた。また私達を高みへ引寄せただけの希望もあつた。登山者は誰でもよく知つてゐる、風の吹廻はしで、或は……といふ望みだ。高山地帯の風は、のしかるやうな雲を吹拂つて、青空と太陽とを、不意に隠かくしてみせてくれることがある。

私達は氷河にかゝるあたりで、岩に寄せかけて横んだ石圍ひの半

ば崩れた跡を通つた。それは征頂者達が第一行程の終りに、夜を、さかしら山頂への最後の攻撃と大きな犠牲を拂つて獲得した勝利とを前にして、恐らく過激な焦燥の夜を、過ごした跡であらう。

岩の間を跳んだり、岩屑に擦られた堅いクラストに滑つたりしながら、私は、かつてこのルートを敢て試みた先達者達の手によつて積まれ、いまは崩れかゝつた小さなこの石圍ひを、ひそやかな感激をもつて想ひめぐらしてゐた。孤

獨な山頂に、或はまた恐ろしい絶崖に臨んで積まれたケルンも、また同じやうに、なんとなく響へない美しさをもつてゐるものだ。灰色のどんよりした、じつと動かない暗い雲の淋しさが、黙つて

歩を運んでゆく私達の心に微つた私達のまはりには、牢獄の塀のやうに冷酷な、くろずんだ岩とモレインとに縁どられた氷河の窪み、その死のやうな景観があつた。

この蒼白なたそがれ、私達はいづこを指して行かうとするのか？ 彼方へ……？ 岩尾根に大きく抱かれて、氷河が雪田のやうに廣くなつてゐる彼方へ！ どこかはつきりとは知らない彼方へ！ さだかにはみえない彼方へ一夜の宿をかしてくる岩の方へ……。

光

曉の光の波が、大空の色もないつめたい、ほの明るいなかに交じつてゐた……

日輪が地平線に浮び上つた……峰頂がつぎ／＼に燃えはじめる。光のあたつた氷が眞赤になる。光は山を染め、萬年雪に沿ふて静かにおりてくる……

光は尾根の岩の目を醒まし、花崗岩の岩塔を輝かし、恰も久遠に直立不動の焰をもつ巨大な燭燭のやうに、それらの岩峰を燃え立たせる……

光は斷崖をさぐり、岩の割目やクローアルから夜を追放し、雪の山を照らしてゆく。光は氷河の上に伸びて、セラツクヤクレパスの蒼い蔭を消して、擴がつてゆく

……と思ふまでもなく、ガレや堆石のあたりをかすめた光が、もう牧場の上にキラ／＼と射してゐる。やがて光がサツと谷にまで及んだ……

それは、あたかも自然の血管に生命の律動が傳はつたやうに見えた。

森も岳もけがされぬ日の悦びを知つた……斜めな光は荷ほのびて黒つばいシャレーにあたる。小さい窓硝子がきらめいた。會堂の正面が、白くあざやかに光る……人々は勞働に想ひをはせる……

かうして光はその力をのびしながら、平原の方へと擴がつていつた……

夜のあいだ、死んだやうにみえた荒々しい自然に、生が蘇つたのだ……

本會事務所移轉

本會は今般大日本體育會に加盟し、事務所を左記に設置しました。詳細は次號に御通知致します。

東京都神田區駿河臺（聖橋際）岸體育記念會館内

社団法人 日本山岳會

電話 神田三六番 內線 三番

振替 東京四八二九番

圖書批評

圖書批評につて

登山は、他のスポーツと違つて一緒に登らない限り、人の登山を見ることも出来なければ、直接に學ぶことも出来ない。登山について経験を豊かにし、視野を廣くし

自分の登山そのものを更に向上させるのに、最も役立つものは、登山について書かれたものを讀むことだと思ふ。他のスポーツと比べて、昔から登山に關しては、書かれたものが多いのは、そのためであり、又有難いことだと思ふ。

自分の登山が最もよく批判されそれによつて更に向上の手がかりを求めるにも、書いたものが一番役に立つやうに思はれる。

かうした點から考へる時、登山に關しては、書かれたものに對する批評は非常に大切なことになる。日本山岳會としても、山岳會の立場から公正な、そして權威のある圖書批評をすることは、重要な事業の一つであるわけである。従つて、此の度ブックレヴュウ委員會を作り、その委員會で出来るだけ

廣い範圍に亘つて山に關する圖書の批評を行ふことゝなつた。方針としては、委員の圖書批評の結果を委員會に持ち寄り、十分に討議檢討の上紙上に發表することにしてゐる。従つて圖書批評の責任はその委員會にあることを御承願ひ度い。

この企てによつて、山岳圖書の質の向上に、そして誤つたもの、虚偽のものを是正することが出来れば、日本の登山に幾分の寄與をなし得ることゝ期待してゐる。

猶この機會に會員諸氏に御願ひ置き度いことは、山に關する良き著作にお氣付きの節は、是非御知らせ願ひ度いことである。殊に地方に於いて出版せらるゝ圖書などについては、日本の登山界のために、御氣付きの時は、著者、題名入手方法等につき御報知を賜り度い。

委員一同も、日本山岳會の責任を十分に承知し、懸命に努力を續けることを誓ふものである。

今日は、その第一回の批評であるが、會報の休刊中批評漏れの圖書もあるので、新刊のみに限らず古いものへも及んでゐる。

山の詩

井上康文氏の詩集『山上の蝶』

は、山を想ふの詩集である。直接に想ひ出の山を歌つた詩『心の連峰』『頂きにある影』の二つは素晴らしい詩だと思ふ。

輯められた六十五篇の詩の大部分は、生活を歌つた詩ではあるけれども、どの一篇からも、山を想ふ著者の心が、色鮮かににじみ出てゐる。著者が、どれ程登山に深い経験を持つてゐる人か、全く知らないが、著者の生活の中に、想ひ出の山が、強く深く根を下してゐること驚くほどである。

街の生活を歌つた著者の詩を讀んでみると、その詩の遙か彼方に山々が美しく輝いてゐるのが感じられる。著者は『山は美しい情熱をもつてゐる』と歌つてゐる、私は、著者は想ひ出の山に遠い祈りを捧げてゐるのだと思ふ。

かつて登つた山々の想ひ出を美しいと思ひ、そしてそれらの山々が日常の生活の中にも想ひ出される人々にとつて、この詩集は強い共鳴を感じさせるであらう。山を歌つた詩でもなく、山登りを歌つた詩でもない。しかし、もつと身近かな生活の中にある想ひ出の山を歌つたこの詩集は、讀者にそれだけ深い感銘を呼び起すことと思ふ。

山に關する詩集として、山へ登る者が讀んで與深きを覺える優れた詩集である。(井上康文著、

『山上の蝶』(一六六頁) 寺本書房發行、昭和廿一年五月刊、定價十五圓)(u)

「山岳渴仰」をよむ

われ／＼の大先輩の一人、中村清太郎氏の著書『山岳畫家として獨自の境地を拓いてきた著者が、登山紀行の作家として、同時代の人々よりもより後進者にしてすぐれた登山紀行をもした人々をも含めて、明治以降の山岳文學に於て、記憶せらるべきひとりであることゝ、近頃の登山者は氣付かずにあるかもしれない。といふのは、著者が生彩ある記録紀行を『山岳』誌上に盛んに發表して、わが國登山界の目を醒らせたのが大正の初年であり、そのうち約二十年に近く繪筆をとるに専念して纏つた登山記の發表を見なかつたために、著者はカンパスの上にのみ山を描き、原稿用紙には山を描かぬ人であると思ひ込んでしまつた人が少くない。

然し、本書の跋に田部重治氏が『われ／＼の仲間では、君は優れた作家になりさうだと思はれたほど名文家の聞えが高かつた』と書いてゐるやうに、著者の文は登山者の心を固へるものを確かに持つてゐる。著者の山岳に對する態度

はこの書名『山岳渴仰』と題してあるとおり、あくまで敬虔な氣持が主潮をなしてゐるが、それが單なる詠嘆に終始することなく、時には山谷の内心深く闘ひを挑むに至つてゐるところに讀者を魅する力があるのだ。著者はまた山麓の山村の風物、山人の生活などにも鋭い眼と深い理解を以つて、これらの美しい描寫を、とかく感激に満ちすぎ勝ちな登山紀行の中に點綴させて、讀者を寛ろがせるにも巧みな腕をもつてゐる。

山の文學、山の文章を書く人の殆んど大部分が、文學文章を業とする人でない。それだからといふわけでもないが、登山者の書くものは、純文學者の作品などに比すると、讀むに足るものは極めて寥々たりといふ論がある。この論にも一應うなづける點はあるが、私はたとへ文脈文字にいさゝかの不備な點があつても、登山者の心を固へこれにアピールし得るものを藏してゐれば、さう無碍に却けるべきでなからうと思つてゐる。

然し一方に於て、山に關する文章と雖も公刊して、ひとに讀まれることを豫想する以上たゞ／＼しい作文のやうなものでもよいといふ理屈はたゞないのであつて、登山者は山に登ることに精進すると同時に、いやしくも自ら紀行記録

を綴らうとするならば、文章文字に深い關心を持ち、その道の勉強を怠つてはならないのである。

本書の大部分を占むる『冬の白峰山脈彷徨』と『大井川奥山の旅』の二大長篇が、發表の(大正二年)當時から三十數年を経た今日でもなほ讀者の心を強く惹くものを失つてゐないのは、その描寫の點でも、山の登り方の點でも、變らぬ新らしさをもつてゐるがためと言ひ得る。

併せ録する他の諸篇も、夫々著者持味がよく出てゐるが、卷末『草の芽』と題した生ひ立ちの記は、著者を親しく識る者には、特に興味よくまれる。かの伊太利亞の登山家、ギド・レイが『アルプスの雪』と題する著の中で、少年時代、山に心を惹かれてゆく経緯を巧みに描いてゐたのを想起させるものがある。

をばりに、こんな好い本が見るも無残な紙質、印刷をもつて世に送られたのは残念である。著者も恐らく甚だ不意だつたに違ひない。印刷は文化の尺度のひとつなり、といふことは出版業者は心得て貰ひたい。(ふざしき)

(中村清太郎著『山岳満仰』昭和十九年十月生活社發行四圓二十四錢)

會員通信

登山なさつた折に見聞された山小屋の状況や、登山道の荒廢或は復舊の模様、交通機關の變化等について、簡単に葉書でも御通信下されば、直に本誌上に發表致します。それは後至者に多大の便宜を與へることもありませう。會員外の方もどうぞそれだけの勞をお取り下さるやうお願い致します。

(編輯部)

穂高通信

伊藤洋平

初夏の穂高を一日歩いて見ましたので最近の状況を左にお知らせ致します。

六月二十五日早朝上高地を出發岳澤をつめて、一枚岩澤に入り一枚岩を経て、前穂高に至る。その後、前穂・奥穂の最低鞍部へ下り、夏期に降路として利用される這松の屋根を約百メートル下降、その附近から尾根の奥穂よりの雪溪に入つて、一氣に池の平に下り裏風の下あたりより雪中から所々あらはれ始めた道を進んで、本谷と横尾で徒渉、穂高を経て夕闇の迫る頃、上高地に戻りました。

途中、問題となる様な箇所は、

ルートの性質から見ても全く考へられませんでした。前日までの豪雨のために一枚岩の先と後にあるルンゼ状の岩場が、文字通り濡になつてゐたこと、及び同様の理由による本谷と横尾での腰まであつた徒渉で、少なからず手こずつたことと、縦走路とは言へ久しく人が通らず荒れるにまかせられてゐたことが想像できるために、平凡な岩でも信用が出来ずに一々慎重なテストを要したこと等が、印象に残つて居ります。

雪は一般に平年より多く、岳澤の底は水飲場よりやゝ上方まで大きな残雪のインゼルがあり、各澤筋には、三分の一位の所より上部に、また二分の一以上は連續的な残雪が見られ、前穂のあたにも例の雪が流石にケルンの高さよりは少し低くなつてゐましたが、依然として存在して居り、潤澤は裏崩風の下あたりまで一面の見事な雪で、テント地は勿論のこと圓山さへも僅かに岳澤の枝が出てゐる位、それでも潤澤小屋は完全に現れてゐて雪害のために少し谷側に歪んでゐました。

次に、此度の山行中に知り得た情報のうちで、何らかの御参考に

なりさうなものを記して見ます。

一、島々宿の水害について
昨年秋の全國的な風水害に際して島々谷の溪流が、文字通り古今未曾有の増水を來たし、堤防は潰壊しそのために兩岸の家屋は流失あるひは土砂に埋没した。潤澤小屋の平林次男氏、西穂小屋の村上守氏等の家屋は全く流失、西穂屋奥原英男氏方では土砂のため階下を失ひ、現在直接に二階へ出入りする様な有様であります。

二、上高地の宿泊所について
上高地の宿屋は(進駐軍將兵の爲に七月一日より使用される帝國ホテルを除いて)本年五月末頃より全部營業を始めて居ります。食糧持参は主食だけで充分な様子ですが、上高地だけ食糧事情に特例のある筈のないことは、勿論であります。

三、山小屋について
穂高小屋は、今春來引き續き開いて居りますが、それより高所の穂高の小屋では、潤澤小屋西穂山莊が共に七月上旬以降、これは主人の平林、村上、兩氏共前述の水害に遭つて居り、その後仕末等の關係上、入山の日が前もつて確定出来ないが、十日以降なれば確實であるとの話です。穂高小屋、焼ノ小屋の開設も、その頃になる様子です。

四、登山道について
上高地——穂高間、本年六月中旬頃、營林署の計畫に従ひ島々の

人夫衆の手により充分に修理されたが、二十日前後の雨により、古池——穂高手前迄の林間の道が、梓川の氾濫のために(約二千米の間)平均膝まで位の流れとなり目下善後策を考慮中。

穂高——潤澤間

棧道の落ちたるもの、横尾寄りに二、三ヶ所、いづれも無理をすれば通過可能な程度。横尾の出合ひ手前の『砂の急斜面』を横斷してゐた所は、道の痕跡も認められぬ程の崩れ方で、しかも川筋が變化して梓川の本流がその斜面の裾を洗つてゐるために、通過不能。約五十米上方のブツシュと『高廻り』すれば、からうじて通過しうる。『横尾の渡し』は徒渉せねばならない。潤澤本谷出合にも勿論橋はなく、この箇所の徒渉は増水期ならずとも一考を要する問題である。その他横尾——潤澤間では道がガレーを横斷するところは、いづれも荒れてゐるが、通過には差支へない程度。いづれ潤澤迄は可及的速かに修理したい、との地もの話であるが、目下のところでは不明。

岳登登山道——

森林地帯ではさしたる變化なく喬木地帯に入ると、道が兩側の樹木の枝または熊笹に覆はれて見えぬ位のところあり、また一ヶ所崩

壁が甚だしいところがあるが、ガレーを歩く氣にさへなれば、さして問題ではない。縦走路は、岩に描いた標識が、ほとんど認め得ぬ程に、消滅してゐるために、それに依存することは危険でありませう。

徳本越

前述の水害以來、最も甚だしく荒廢してゐたが、六月二十日頃迄に島々部落の人々の手で、『二股』まで修理を完了。それより先は、『瀬戸』の、數年前より半壊の儘であつた棧道の完全流失により通過不能。『鮎止』の前の橋も流失。引續き島々の土木委員齋藤氏等の手により復舊の努力がなされてゐるが、現在の所では開通する期日は不明であります。(以上の状況は、すべて六月二十五日現在のものです)ありますが、一般に早急には回復しような様子がありませんので、今夏は必ず豫め計畫の事前にそれらの現状を詳しく問ひ合はせられるのが賢明ではないかと愚考いたします。

編輯部註 この附近の道路は夏期中に大體修理された。

東駒の春

小倉 志郎

私は、社友一人を連れて東駒へ

行つて参りました。食糧難の今日何處へ行つても同じだらうと思ひ千葉で買求めて三升ばかり持つて行つたので山中三泊しながらも充分悠々と楽しんで來ました無風好晴で山から下つて來るのが惜しかつたです。でも最初の日は午後八時迄頭張つたんですが五丈小屋へ到達出來ずに、一八七三Mの尾白側急斜面に雪のない所を選んでビバークしました。風のない暖かい晩でそれにキラ／＼星が輝いて矢張雨の山は暖かいのだなアといひ乍らシユラーフから首を上げては夜中にホットウキスキー(テルモスの)を二人でのみました此味忘れられませんが御想像下さい。第二日は七丈迄行つて小屋使用不可能で五丈迄戻る、第三日目頂上往復、第四日目小屋使用料支拂のため横手村中山國重宅を訪れましたが苗代のため一家全員外出、ために半日を繰先で遊び日暮れて歸宅した國重君に歎められて一泊、第五日目のメーデーの日に贅澤な靈汽車で歸つて來ました。

頃には是非もう一度登つてくれと事です、今年の夏山は食糧は駄目かも知れぬが小屋は開くつもりといつてゐました。五丈小屋は昔原村の分は駄目ですが中山の小屋は丈夫で損じてゐませず私達ラクしました。

笹の平は戦争中の刈入がなかつたためだけのび、雪が若干ある上に濡がねてゐたところも歩行困難で時間を喰つてしまつたのですが竹宇側の駒井を出たのが午後〇時半、(何しろ華崎からのバスがあてにならず)八時間を要しヤット△一八七三Mの手前ですからヤリキレませんでした。でも四日共快晴で助かりました。(昭和二十一年六月)

(九州) 法華院にて

松岡 實

久住山麓の長湯村へ約一ヶ月間の豫定にて出張して居ましたが昨日用務を終へ、開放された様な氣持で山の湯法華院温泉に寛いで居ます。毎日山を仰いでの生活にて本日は其の一ヶ月間の望岳の想ひが達したわけですが、此處にも都會にて毎日體驗する不親切さが露骨に現われ、往時の法華院をなつかしんで居る様な次第です。戦争前登山者の爲の根據地といふが如

き零團氣の温泉場が、殆んど、入湯客(湯治客)本意の温泉場に變化し、昔の素朴な山の湯の姿が失われてゐる傾向の見受けられるのは哀しむべき事と存じます。本會會員であり、筑紫山岳會々員である權藤太郎氏も來山の由、女中氏から聞きまして、是非共御會ひしたく想つてゐます。

尚法華院は主食並副食物一切持参者以外は、宿泊出來ませんので登山者は留意せらるゝ要があります。筑紫山岳會のアセビ小屋も永く放置せられて現在では使用は不可能の様に見受けられました。残念な事と存じます。

九重の主と呼ばれ、九重に貴重な足跡を残された往年の筑紫を筆頭とする登山人達の消息に想ひを馳せて此の荒み、あれ果てた法華院と、アセビ小屋を眺める時、何か反省させられるものを感じます(二十一年六月・七日)

回

柴山 登茂次

會報一三三、一三四號有難く拜受いたしました。長らく知ることを得なかつた山岳會の情況と會員各位の御消息の一端が分りまして本當にお懐しく思ひました。山岳會焼失のことは昨夏神谷さんから

聞いて知り、その後武田先生からもお便り戴きましてまことに残念に思ひました。殊にあの貴重な山岳資料が灰燼に歸したことは返へず／＼痛恨に堪えません。嘗て神谷さんが會員の一人々々で五冊でも十冊でもいい、安全な場所へ疎開を豫言しては提案されたといふことを聞きましたが、吾々はあまりにも自己の保身に奔命、會對する愛を失つてゐたことを今に思ひ、自責と後悔の念禁じ得ません。

本暮先生の記念文庫もまた鳥有となりましたよし、先生一代の苦心にかゝるヒマラヤの貴重な文獻もつひに世に出ることなく一握の灰と化したことは何としても無念でなりません。私は塚本さんの山岳會に對する絶大なる愛と不斷の御努力を目のあたりに見て知つて居り、氏の御胸中を思ふと御氣毒に堪えません。

霧の旅會で刊行いたしました、本暮先生追悼號も罹災をまぬがれた少數の會員の手許に残されたにすぎませんが、山岳會でもいづれは先生の追悼號を編まれることゝ信じますので、そのせつには相當役立つのではないかと思います。猶ほ霧の旅の巻頭に飾らして戴いた先生の絶筆原稿は危く罹災からまぬがれた數部の愛蔵山岳書と共に

に私の手許に大切に保存して居りますことを申添へて置きます。

なほまた同誌に寄せられた荒井道太郎氏の追悼文は奇しくも氏の絶筆となりました。この原稿も手許に愛蔵して居ります。交友十五年、幾度か山行も共にした氏の他界は洵に心淋しい限りです。

山岳會の知己も、霧の旅會の同志も大方に離散してしまひ、その中には知らぬ間に故人となつてゐる人もあらうと思ひます。寔に往時を顧れば茫々として夢の如くであります。昨年四月十三日夜震災いたしました私は、昨夏以來廣島縣に假居、今では土地の人達とも親意になり、山峽の四季を楽しみつつ、再建に努力いたして居ります。

擲筆に當りまして會員各位の御多幸と山岳會の發展を衷心より祈り上げます。

追 懷

信濃路や若葉の上の雪の峰

(昭和二十一年 月十七日)

會務報告

六月常務役員會

六月二十二日午後二時於大日本體育會

出席者 松方、藤島、鳥山、木村

浦松、中司、沼井、田邊、林、谷口、關根、今村、垣内、塚本 他ハ委任

議長 松方會長

一、本會ノ組織擴張並ニ新事業方針ニ關スル件

本會ノ現狀ニ鑑ミ且又現下ノ狀況ニ應ジ、會ノ機構ヲ擴張シ、全國的ニ會員ヲ獲得シ、全山岳人ヲ包含セル組織ノ上ニ多角的ナル活動ヲ開始スル方針ヲ決定

右ニ關スル具體的ノコトハ追テ發表ス

一、ブツクレヴエウ委員ヲ置キ、毎月一回會合シテ連絡協議ス委員ハ當分左ノ五名トス

浦松、藤島、田邊、關根、松方

一、七月十四日(日) 午後一時小集會於藏前工業會館

講演 ウェストン著『日本アルプス登山ト探検』出版五十年ヲ記念シテ

講師 松方三郎、浦松佐美太郎

一、次回役員會 七月二十七日午後二時於藏前工業會館 以上

昭和二十年度決算報告

收 入

入會金及會費 三五〇・〇〇

保險金 五〇〇・〇〇

其他收入 一一三一・六三

繰越金 二六〇四・三九

合 計 九〇八六・〇二

支 出

研究調査費 八六五・五五

關西支部費 四五〇・〇〇

事務費 二八六・一九

假受金返済 一〇〇・〇〇

計 四二七五・七四

差引剩餘金 四八一〇・二八

合 計 九〇八六・〇二

昭和二十一年度豫算

收 入

入會金 一〇〇〇・〇〇

會費 一〇〇〇・〇〇

印 稅 六〇〇・〇〇

廣告料總收入 一〇〇〇・〇〇

利 子 五〇〇・〇〇

出版物配布收入 三〇〇〇・〇〇

山岳發行助成金 二五〇〇・〇〇

繰越金 四八一〇・二八

合 計 五一三一〇・二八

支 出

山岳發行費 二五〇〇・〇〇

會費發行費 五〇〇〇・〇〇

研究調査費 一五〇〇・〇〇

交通通信費 一一〇〇・〇〇

發 送 費 二〇〇〇・〇〇

人件費 四六二〇・〇〇

關西支部費 八五〇・〇〇

雜 費 五〇〇・〇〇

事業豫備金 一〇七四〇・二八

合 計 五一三一〇・二八

會員消息

太田 敬氏 復員後東京海上火災
保險大阪支店に勤務
早大山岳部 本年度委員越智英夫
齋藤力與兩氏
井田博基氏 昨年九月復員留守宅
全統の由
雄川陸之助氏 岐阜農林專門學校

長に就任
山田多市氏 スマトラ島より歸還
西岡一雄氏 好日山莊再開準備中
の由
伊藤久行氏 五月下旬ハルマヘラ
島より無事復員
法政大學山岳部 一月、二月熊の
湯スキー合宿、四月八ヶ岳縦走
五月谷川岳マチガ澤合宿を行ひ
夏は千丈澤合宿の豫定
柴垣重一氏 昨秋滿洲より復員姫
路市役所建設部在勤
宮内恒秋氏 尙南方にあり七、八
月頃復員の見込
宮島英郎氏 ジャワにあり
小原勝郎氏 六月無事復員
鈴木克英氏 四月臺灣より歸國
吉阪隆正氏 昨秋朝鮮より復員
松山武貞氏 プーゲンビル島より
復員目下マラリヤ療養中
月原俊二氏 比島にて無事の旨復
員した石原博和氏の情報
石原博和氏 十二月臺北より復員
中島正文氏 三月末越中津澤町の
大火で全焼、但し古文書等ごく
主要なものは搬出無事
笠原藤七氏 五月八日越後村松町
の大火で全焼、貴重な文獻等を
焼失
小野友次郎氏 復員住友銀行赤坂
支店へ復歸
村瀬 圭氏 サイパン島に令息を
亡くす
竹内予念子氏 聯合軍檢閲部に勤
務
藤島 玄氏 令息と共に春の杓差
岳に登山
伊藤洋平氏 六月の穂高に單獨行
名須川浩氏 四月薬師岳に五月獨
立山に單獨行
風見武秀氏 六月十日ニューギニ
アより無事歸還
高田俊雄氏 復員
色川幸太郎氏 終戦後復員
豊田春滿氏 此度無事復員北大第
一解剖學教室へ復歸
小林清孝氏 秋田木材本社人事課
長勤務中
上田哲農(舊名徹雄)氏 世田谷區
奧澤國民學校へ轉任
田邊主計氏 五月三十日付帝國銀
行横濱支店へ轉任
近藤茂吉氏 藥料高原へ疎開中
外山義夫氏 六月六日復員
石井鶴三氏 制作(彫刻、畫)と
教育(美術學校教授)と百姓(甲
州上野原奥地)の三つの生活に
一週のうち東京四日、甲州三日
の多忙な生活を續けらる
塚本閑治氏 七月下旬德澤、大瀧
山等に畫作
岡生工專山岳部 五月中旬山岳寫
眞展を催した
黒布光兼氏 六月上旬ジャワより
復員
上田勇次氏 五月初南支より復員

石川欣一氏 目下毎日新聞社出版
局(東京)に勤務中
泉尾 忠氏 六月十一日西部ニ
ウギニアより復員

今村昌耕氏 北海道網走保健所に
勤務、豫防醫學に専心の由
三田幸夫氏 岩井産業會社演劇出
張所に勤務中

大澤伊三郎氏 望月親氏等甲府の
南嶺會の人々が會合し、今後の
方向につき協議の由

矢頭獻一氏 山村文化振興會の用
事で伊那地方に六月一―十五日
出張、講演、森林生態調査等に
あたらる

